



たより

「闇に燈る聲」に寄せて

西松布咏

今年も師走月が近くなったせい、とりとめもなくものを思う刻が増えてきた。この歳まで生きてくるとそろそろ終わり方を考えなければと思うようになる。そんな時・・・やはり4月12日に急逝した加藤さんを思う。

昨年末に「仁和寺公演を最後にしようと思ったけど、どうしても「歌行燈」を再演したいの。」私の言葉に、彼女は直ぐに頷いてくれた。

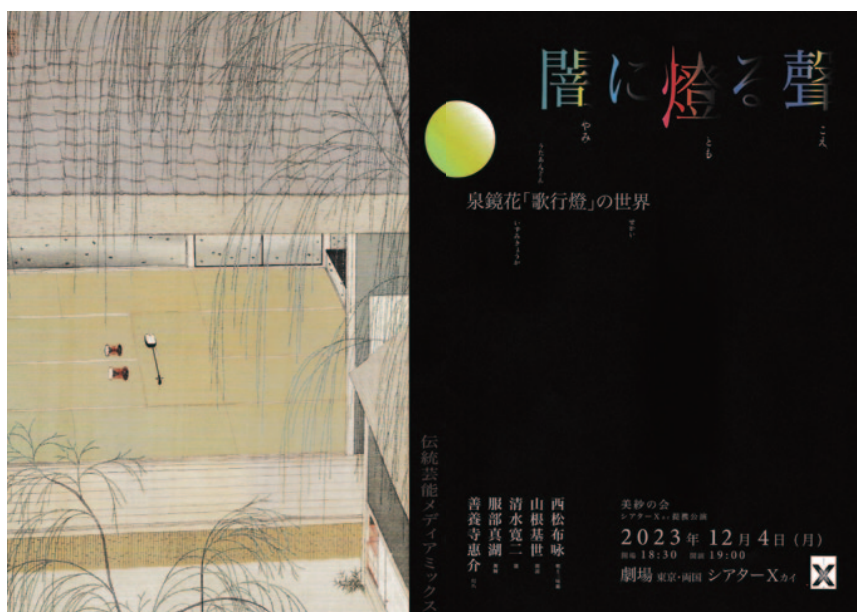
癌が再発し闘病中の今年3月10日芝プリンスホテルのロビーに来て欲しいと電話があつた。久しぶりに会える！と息を弾ませて駆けつけると大きな荷物を側にした彼女がロビーで迎えてくれた。荷物の中に帯や仕付けのついたままの着物が4枚入っていた。まるで趣味が違うのに、そのすべてが私に似合う色合いだった。

薄紫の辻が花染は「歌行燈」を唄う時に着てね！楽しみに舞台の袖で見ているから・・・」その言葉が最後の別れとなってしまった。

「歌行燈」は平成12年12月12日に比較文化、江戸文化研究家の田中優子さんが私のために「幻のお三重」を作詞して下さったのがきっかけで「時雨降る夜の逢うは別れ」と題して上演した。しかし私の力不足により未消化に終わり、いつか再び・・・常に心の片隅から消えなかった。

そして20年後の1月友人と連れ立ち両国のシアターXの舞台を観た時、ついにその微かな燈が私の心に灯った。
かつて「アジール」や「不忍の女」を演出して下さった映像作家の飯名尚人氏にその想いを伝えると「是非やりましょう！」と3月24日に最初の打ち合わせとなった。

その昔「歌行燈」の舞台となった伊勢路をたどり夢幻の夜のしじま漂う桑名に一人旅し、文面に登場した船津屋の座敷や饅頭屋にも立ち寄ったこと、なぜ再演したいのか、今度はどのように舞台化したいのかを細かく話し合った。



NHK初めての女性アナウンス室長として活躍されたその音声に憧れ続け、是非朗読を！の願いを受け止めて下さった山根基世さん、多岐に亘るメディアで活躍され幼少時に会得した古典舞踊を海外に広めたいとエネルギーあふれる活動をされている服部真湖さん、文一恩師の導きにより尺八の音色で幽玄なる宇宙を表現される存在を知り得た善養寺恵介氏。そして「歌行燈」の重要なキポイントとなる仕舞は古典能だけでなく現代劇や伝統芸能と融合すべく新作能にも取り組んでおられる清水寛二氏を飯名さんから紹介された。

こうしてこれ以上望めない素晴らしい共演者を得て12月4日に向かっての日々が始まった。

今回のコンセプトは「芸と霊」

若い頃は何でこんなに時代遅れでマイナーな音楽に出遭ってしまったのだろう・・・と嘆いたものだが、年を重ねたこの頃では長く辛かった道のりを歩んだ喜びを感じるようになった。そして歳を取るのも強い悪くはないと思うに至った。

美紗の会で弟子を教える師匠を務めながら我が芸を極めるべく道を歩み続け半世紀以上が過ぎた今、差し向かいの稽古は、単に曲を教えるだけでなく我が思いを伝える心とそれを受ける弟子との心の通い合いと思うようになった。

「伝える」の意味は、ある人の意向が他の人に伝わる。文化や物が離れた場所からもたらされて代々受け継がれて今に残って行く、とある。芸事の伝授はまさしくこれだと思う。

一昨年母が他界し家族がいな寂しさで孤独感に陥ることもあるが、三味線を弾き始めると、いつしか現実から離れて魂が浮遊して古代から累々と語り継がれてきた望遠の聲で私の心は満ちてくる。それは代々培われてきた先祖の芸能を伝授して下さった

多くの師匠の愛情が霊となって私の身体に息づく瞬間なのだろうと思う。

そしてその喜びを伝える弟子を持ち、過ぎ去った時代の光景や男女の切なく愛おしい思いを、次世代につなぐことができる日本芸能に出逢った幸せを日々感じる今日この頃である。

「歌行燈」の能役者喜多八が旅先で会った地元の能楽師の芸を、芸熱心が高じて辱め憤死させてしまった父を持つお三重に夜明けの松林で一曲の舞を伝授したことで男の想いが女の身体に霊となって染み込んでゆくことと描いた鏡花の母は能楽者の家に生まれた。

その血を引く鏡花ゆえ芸とは斯様なものであると読者に伝えたかったのではあるまいか。私は6歳で三味線に出逢い芸事として半世紀以上続けてきてようやく辿り着いた気付きである。なぜ二十年後に再演したかったのか？を鏡花は私に教えてくれた。

奇しくも今年11月4日は鏡花生誕150周年にあたる。加藤さんから託された着物を纏い、心して12月4日「闇に燈る聲」の舞台にのぞみたいと思う。

「藤十郎の恋」余韻さめやらぬ至福のとき

前川真紀子(紫咏)

水無月二十四日大安吉日、人形町のよし梅 芳町亭にて、西松布詠師匠の唄と三弦、篠井英介氏の朗読による菊池寛著「藤十郎の恋」を鑑賞する幸せな機会を得ることができた。関東大震災直後に建てられた数寄屋造りの、なんとも風情のある老舗料亭の奥座敷の床の間には白の鉄線、どうだんつつじ、かえでが花籠に活けられており、それを背景に、布詠師匠の富本節「お梶」が「春の夜の夢の浮橋途絶え

して」と始まり、それに掛け合うように篠井さんの「藤十郎の恋」の語りが重なり、呼応していった。布詠師匠にとっては、十数年ぶりの富本節「お梶」の再演だそうで、これに至ったのは、昨年、草咏さんから「富本のお梶を是非、お教えいただきたい」と乞われたことがきっかけだったという。師匠は、草咏さんのために十数年ぶりにこの唄にとりくまれ、昨年末からこの年始にかけてようやく「お手本」を草咏さんに届けることができたという。そんな矢先、よし梅さんからの声がけで、篠井英介さんとの共演で何か演目を考えて頂きたいとのご依頼を受け、師匠から、「藤十郎の恋」を篠井さんの語り、師匠の唄と糸の演目としてはどうか、と提案されたそうだ。

「藤十郎の恋」は、元禄時代に実在した上方歌舞伎の名優坂田藤十郎を主人公として描かれたもので、藤十郎は当代一の名優と謳われつつ、自身の芸に行き詰まりを感じ、人知れず苦悩していた。そんな時、

藤十郎の心に浮かんだのは、これまで演じたことのない役柄で近松門左衛門に新境地の新作を提供してもらったことだった。近松は、藤十郎のために新作を書き下すが、それは大経師の女房おさんと手代が不義密通し、刑死するまでの命がけの恋を描いたも



のだった。この新境地の役作りに日夜苦悩した藤十郎は、ある夜、役のために、幼馴染でもある貞淑な人妻・お梶に偽りの恋をしかける。藤十郎のこの悪魔的な思い付きにお梶は翻弄され、畳みかけるように情熱的に口説く藤十郎に、とうとう、お梶は、必死の覚悟をきめ、傍らの行燈の灯をふっと吹き消してしまう。ところが、藤十郎は、さっとお梶の傍らを走り抜け、彼女を一人置き去りにしてしまう。暗闇に取り残されたお梶は、この残酷な辱めに一人耐えるしかなかった。一方の藤十郎は、「人間の面(おもて)とは思えないほどの、すさまじい顔」をして、「この度の、狂言の工夫がようやくなり申したわ」といしながら、声高にわらってみせた。が、「その声は、地獄の亡者の笑い声のようにしわがれた空っぽな、気味の悪い声であった。」

このくだりの、篠井さんの語り、師匠のお梶の唄と糸の掛け合いを聴いているうちに、突然、オスカー・ワイルドの「ドリアン・グレイの肖像」が思い浮かんだ。人間は時として不条理な行動や感情に翻弄され、それに惹かれもする。この偶然も、海を越えた作家同士のある種の共時性(synchronicity)のなせる業だろうか？

偽りの恋をしかけて得られた藤十郎の「芸の工夫」により、恐ろしいまでに真に迫った密通の演技は、京の大評判を得た一方で、いわれのない辱めを受けたお梶は、哀れ、自害してしまう。布詠師匠は、「十数年前にお梶を舞台で唄ったときは、お梶が哀れで、その想いを唄ってあげたいと思った。でも、今回は、むしろ、藤十郎を責められない。藤十郎の芸に対する苦しみ、深い苦悩がわかるだけに、一概に、己の芸のために、心にとめていた幼馴染の女を利用したと責めることはできなかった。藤十郎が役者だからこそ、その苦悩の果ての偽りの恋が許せるの。」お稽

古場での師匠のお言葉に、私は涙があふれそうになるのをかろうじて堪えた。

藤十郎の芸に対するすさまじいまでの執念は、「許す、許せぬ」と単純に割り切れるものではない。お梶のあわれな末路の後、彼は「芸のために女のひとりやふたり」と必死に言い訳をする。しかし、心の闇は深く、その演目を演ずるたびに、彼の心を苛み続ける。役者としての表の顔はますます冴え冴えと美しく映るが、心の闇の中の面(かお)は、この世のものとは思えぬほどの無残な面相となっていたのだらう。残酷な仕打ちを隠れて行うドリアン・グレイの美貌がますます輝く一方で、彼の肖像画が無残な面相に変化していくかのように。

「芸術家にとっては思考も言葉も芸術の道具である。芸術家にとっては、悪徳も美德も芸術の素材ではない。表現形式においては音楽家の芸術が、感性においては俳優の演技が、すべての芸術の典型である。すべての芸術は、すなわち表層と象徴でありたっている。危険を冒さなければ表層の下に踏み込むことはできない。危険を冒さなければ象徴を読むことはできない。芸術が映し出すものは、人生ではなく、その観客である。」(オスカー・ワイルド「ドリアン・グレイの肖像」序文より引用)

宵にま見えし面影は藤紫の色に出て

嬉し恥ずかし連舞に

忍び忍びの恋の通い路

雪は津花か白玉か

思いの竹も折れよとつる

(富本「お梶」より引用)

小唄は、男から見た「こうあってほしい女」が描かれているものが多く、必ずしも女の視点から描か

れるものではない。「藤十郎の恋」も菊池寛の視点から藤十郎の心理描写は詳しく描かれている一方、お梶が何故、ただ一人の死への旅路を選んだしまったのか、そうせざるを得なかったのかは、物語の行間を読み解いていくより他無いと感じた。もう少し、お梶の想いに寄り添ってみよう。

お梶は、かつて祇園祭の折に、藤十郎と一緒に連舞を舞った芸妓で、茶屋宗清の主人に見染められ、芸の道を捨て、貞淑な妻として生きる人生を選んだ。



しかし、藤十郎の偽りの恋の仕掛けに自ら応えてしまったとき、昔の芸妓としての残り香が消えていなかったこと、かつて自分が(藤十郎と共に)いた場所に一瞬にして立ち戻ってしまったことに激しく動揺し、羞恥し、自分を許すことが到底できなかったのだらう。もはや、この先、生きては行けぬほどに。そして、死を選ぶことで、藤十郎への復讐も果たしたかったのかもしれない。貞淑な妻としての人生を全うできるはずだったのに、己の芸のために幼馴染のお梶の人生を狂わせた男の心にずっと住み続けることで、藤十郎の心に深く突き刺さった、決して抜けない刺として、人生最後の恋の相手たる藤十郎の一生に添いたかったのかもしれない。そのような狂おしくも激しく深い一途な心ゆえ、藤十郎の芝居がかかる万太夫座の楽屋の片隅を最期の死に場所と定めたのだらう。

これは、今の私を感じるお梶の最期の覚悟。数年後、再び「藤十郎の恋」を読み返した時に、また、「お梶」を聴く機会を得た時に、今度はどのような感じ方をするのだろうか？

あだし仇なるわが身は辛や

今日の噂が明日の誠

誠なりやこそ耳に手を

思うてる色の仇名草

「ほんに思えばあの宵のよもやよもやがつい溶けて梅の香りも恥ずかしい愛し恋しの言の葉に 良しやこの身は化野や鳥辺の露と消ゆるとも 恋には誠も真実もあるとの証し立てたいと 女心は愚かしい。待てども来もせぬ人を待つ」(富本「お梶」より引用) 余韻未だ冷めやらぬ至芸の傍らにあること。その幸いに感謝します。

第十回「薊の会」を無事終えての感謝

鶴間茂登子(鶴詠)

私の育った町では、かつてお祭りの際の出し物として地方歌舞伎が上演されていました。近隣の町に市川少女歌舞伎という興行団体があり、十四歳〜十八歳位の少女たちが歌舞伎を演じていました。

祭礼の際に行われる歌舞伎や舞踊の舞台設置に父親が関わっていた関係でいつも舞台袖にて鑑賞することが私の楽しみの一つでした。歌舞伎の縁者が少女たちであった事もあり、より一層親しみを持っていったようです。そしていつの間にかお友達を集めては歌舞伎遊びを始めていました。まだ、小学生であつた私は「傾城阿波の鳴門」「伽羅先代萩飯炊きの段」「将門」等など、不思議なくらい名台詞を覚えてしまい、母親の丹前を引きずって打ち掛けに見立てて遊んでいました。こうした幼い頃の経験が三味線音楽への興味を深めていったようです。昔から人一倍好奇心の強かつた私はその後、日本の伝統芸能に



限らず演劇、音楽など様々なジャンルの芸術との出会いと交流を通して私の感性に刺激を与えてきました。その経験がいつしか自分で場所作りをしたいと思うようになりました。

平成十八年に縁あつて軽井沢に山荘を構えたのを機に自然豊かな場所での交流の場所作りを目指すようになりました。様々なジャンルの芸能を鑑賞し合い、そして酒と肴の小宴を開きお互いの親睦を深めることの出来る楽しい交流の場所をコンセプトに「薊の会」を始めました。今まで様々な演奏者とのコラボレーションと美紗の会のお弟子さん有志の皆さんによる演奏会の開催などを企画して参りました。ポルトガルのファドと江戸唄の共演、唄と朗読と尺八演奏によるコラボ演奏、琵琶の演奏と江戸唄、謡と仕舞と能楽ワークショップ、沖縄三線による沖縄民謡と江戸唄等、思い起こせば本当に様々な多くの演奏者の皆さんのご協力を得ることの出来た「薊の会」でした。そして、第十回を迎えることを期に「薊の会」を終える予定でしたが、生憎のコロナ禍により「薊の会」も中止せざるを得ませんでした。その時の心残りを今回、那須にて第十回「薊の会」として開催することが出来たことは本当に嬉しく思いました。遠路を那須まで足をお運び頂いた皆様には本当に感謝申し上げます。

また、開催に際し多くの皆様のご協力とお手伝いのお陰にて開催できました事にあらためて感謝申し上げます。

那須での開催を提案して下さった布詠師匠を始め、司会進行を引き受けて下さった俊詠さん詠治さんコンビの楽しい司会、宴会でのいつもの軽妙な司会の川崎さん、美紗の会演奏会ではいつもお手伝い頂きお世話になっている前多さん、高橋さんのお二人と種橋ご夫妻には演奏会当日と翌日の師匠の別荘での

ランチパーティにてもお手伝い頂きました。皆様本当にありがとうございました。

演奏会では地元の方やお弟子さんのお友達など大勢のお客様にもいらして頂き、賑やかな会場となりました。演奏会是一部二部の構成にて行われ、第一部は皆さんの日頃の精進を表わすそれぞれに楽しい個性あふれる演奏で和気あいあいとした雰囲気の中で進みました。第二部では布詠師匠の小唄四題と地唄「黒髪」を布詠師匠の唄と三絃で扇ひでさんが舞い、格調高く厳かに演奏会は終わりを迎えました。

そして、演奏会後に行われた宴会会場では、予想せぬ出来事(告知事項)が続ぎ、会場は驚きと爆笑の渦となりました。誕生日のお祝いセレモニーや、お友達との決別宣言あり、そして一番の驚きは突如、宴会場の皆さんの前に進み出た人が結婚の告白と妻となる方に指輪を差し出した事でした。突然の出来事に会場内にいた誰れしもがはじめは真意を理解で



きずがツつきましたが、直に笑いと拍手が湧き上がり、宴会のすべての話題をさらうほどの盛り上がりとなりました。本当に忘れられない思い出となることでしょう。

更に宴会の後の二次会でも大いに盛り上がりしました。二次会場は宿泊ホテルのひと部屋に皆さんが集まり行われましたが、今回の「薊の会」は那須にての宿泊を伴うスケジュールのためか宿泊者の皆さんも帰宅時間の心配が不要な事もあり、宴会での和やかな雰囲気にお酒の量もかなり進んだ皆さんの口も滑らかになり、個人的な話にツツコミを入れたり与会話が弾みました。普段見られないようなリラックスした姿に皆さんのお人柄に少しお近づきになれたような楽しいひと時が夜遅くまで続きました。本当に楽しい時間でした。

そして、翌日は師匠の別荘にて皆さんと共にランチパーティを開催しました。秋晴れの山の緑がくつきり見え気持ち良い天気にも恵まれました。昨日に引き続き皆さんお酒も料理も良く召し上がり会話の弾む時間を共に過ごすことが出来、散開となりました。美紗の会の皆様の温かいご協力のおかげで第十回「薊の会」を無事に終えることが出来ました。ありがとうございました。

薊の咲く季節に寄せて

三浦 勝浩

早いもので美紗の会でお三味線を始めてから今年で7年目を迎えました。幼少から剣道に始まりピアノ、水泳、そろばん、書道、英会話など習い事は色々やりましたが、あまり長続きたことはありませんでした。飽きっぽい私がこれまでお稽古を続けられ

たのも布咏師匠という素敵な指導者はもとより、个性的で素敵なお弟子さん仲間にも恵まれた賜物です。まずは美紗の会の皆様に心からお礼申し上げます。ある歳になつてから突然、せつかく日本に生まれ育つたのに世界に誇れる日本文化の素養がないなんてカッコ悪い...などと思い始めたのもつかの間、当時行きつけていた飲み屋で「三味線でもやってみようもんです」などとぼやいていたところに布咏師匠と居合わせたのは、大げさでなくまさに私の人生を変えた出来事でした。それ以来、月三回あるお稽古とお三味線仲間との交流は私にとってなくてはならない生活の一部となっています。

お三味線を始めてから私に起きた変化というのは



多々あるのですが、中でも大きいのは反復練習による技術の習得は人の社会の営みを豊かにしているのだと身に染みるようになったことです。

伝統芸能やクラシック音楽をはじめロックミュージックなどのアート、スポーツ、外科手術、料理などなど、あらゆる領域で我々に感動をもたらしてくれるカリスマたちがいるわけですが、最近ではそういった達人たちのほとんどが気の遠くなるような時間を人知れず研鑽にあてているであろうこと、思いが及ぶようになりました。このような修練の大切さはなにもプロの方々に限ったことではなく、我々庶民もまた例外ではないでしょう。例えばタクシに乗った際に都内の道をあらかじめ知り尽くした運転手さんなら思わぬ渋滞や目的地の変更があっても気持ちよく目的地に連れて行ってくれる訳ですが、これがカーナビに従って運転するだけの方だとそうはいきません。

このところ滅多にテレビを見ることがなくなりましたが、たまに付けてみても何やら番組を賑わしている芸人さん達とやはら、一体いつ練習して芸を磨いているのだろうか?などと思うことが多くなったからでしょう。また近頃は和包丁が人気で専門店などに行くと外国人観光客で喧しいものですが、鍛えた鋼を包丁に仕上げる研ぎ職人は修練に最低でも10年程度を要するそうです。従来あまり実入りの良い職業ではなかったとのことで業界全体に後継者がなく、よい職人さんがどんどん減っているというのは何とも残念な話です。近頃話題のA-1は我々をこうした地道な作業から解放してくれるといった風潮もあるようですが、自分だけは本業でもお三味線でもこつこつと努力を絶やさずにやっていきたいと思う次第です。

お三味線と出会ってからの変化でもう一つ特筆し

たいのは一期一会と申しましょうか、何気なく過ぎていた瞬間が、かけがえのないものに感じられるようになったことです。

布詠師匠とお稽古では一音一音が丁寧に、かつ大切に扱われます。三の糸を弾いたあとの余韻で遊女の哀しさを表現せよ…なんて当初は正気の沙汰と思えませんでした。が、習っているうちにお三味線で奏でられるごく僅かな、一瞬の違いが分かる気がしてきました。

唄も糸も全く同じ演奏となることは二度と無い、そう考えると練習とはいえない一つの曲に全神経を集中して当時の人々の生活に思いを馳せるのはなんとも楽しいものです。反復練習について触れましたが、かの大谷翔平選手は、とある取材で素振りについて質問された際に「何も考えずに500本振ることくらい無駄なことはないと思います。」と答えたのもけだし至言でありましょう。そんな心持ちで日々を過ごしてみると、猛暑を過ぎてはじめて感じた涼風に、美味しく焼けた走りの秋鮭に、あるいは燃えるように照らされた鱗雲の夕焼けに、いちいち頬を緩めてその瞬間を愛でることができるといえるものです。

季節の趣といえば、忘れてならないのがアザミの咲く時期に執り行われた「第十回 薊の会 初秋の集いII」です。

毎年この時期に休暇をとるため昨年末まで参加できなかったのですが、今年はある事情で初参加となりました。鶴詠さんの取り仕切るなかな行われた演奏会は普段のおさらい会より少しリラックスしながらも、皆様しっかり聞かせるよう仕上げている辺りですがは美紗の会と感心するやう気が引き締まるやらで、私にとって改めてお三味線への愛着を深める機会となりました。また宿泊込のため終電を気にすることなく夜半まで続いた懇親会と、自然豊かな布詠

師匠の那須別邸で行われた翌日のランチパーティーでは、これまた普段より幾ばくか多めの酒量で皆様との親交を深めることができたのは言うまでもないことかもしれません。

奇しくもこのときはプライベートで大変な変革期を迎えており、懇親会の挨拶で参加された皆様からの失笑、苦笑、そして祝福に包まれたのは2023年秋の忘れがたい良き思い出となりました。ちなみに私がどのような奇行を晒したかをここで詳らかにするのも野暮のように思われますので、参加した私達だけの(美しい?)追憶とさせていただきます。



《今後の予定》

◎十一月十二日(日)十二時より

港区立伝統文化交流館

第六十六回 美紗の会のつどい

美紗の会 一門演奏会

◎十二月四日(月)

午後六時半開場・七時開演

両国シアターXカイ

闇に灯る聲

泉鏡花「歌行燈」の世界

唄と三味線 西松布咏

朗読 山根基世

能 清水寛二

舞踊 服部真湖

尺八 善養寺圭介

■たより第99号

発行者 美紗の会

編集責任者 己紗俊咏

デザイン 近藤幹則

■美紗の会

主宰 西松布咏

稽古場 港区白金台三ー二

白金台プレイス三階

電話 (五四四七) 二四二二

E-mail : nfu@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>